

## 手づくりならではの 素朴で温かな風合い

鬼北町の伝統文化「泉貨紙」  
丈夫さが特徴のその紙は  
さまざまな用途に使われながら  
この地域に広まっていきました  
その1枚が完成するまで…  
そこには職人の技とこだわりがありました



### 「泉貨紙」の始まり

鬼北町の伝統文化の一つ「泉貨紙」。2枚の紙を漉いた直後に張り合わせ、1枚の紙に仕上げた丈夫さが特徴のこの和紙の歴史は、天正年間(1573〜1591年)にまで遡ります。

「泉貨紙」とは、天正時代に、現在の西予市野村町にある安楽寺で、土居(兵頭)太郎右衛門が漉き始めた厚紙のことで、その後、西予市を中心に北宇和郡や喜多郡の一部に浸透しました。

「和紙」と言えば、高価なイメージがありますが、当時「泉貨紙」は庶民の紙として浸透し、楮(こうぞ≡別名かじ)を原料としたその丈夫さから、金属の丁番が買えない貧しい人たちが、屏風の丁番代わりに使っていたと言われています。

また、その丈夫さ故に一時は「天下の名品」と称えられていたとも言われています。

### 鬼北地方へ浸透

鬼北町(旧広見町)の泉貨紙の歴史は、江戸時代の寛文年間(1661〜1672年)に、広見川沿いの泉地区で生産が始まったと言われています。

当時は、農家の人たちの副業として紙漉きが浸透。農閑期を利用した「仕事」として生産され、需要の多さから生産業者は数百軒にも上ったと言われています。

しかし、終戦後を皮切りに「泉貨紙」の需要は激減。昭和30年頃に再度盛り上がりを見せるも、次第に衰退。昭和44年6月頃、広見町の手漉き和紙は消滅してしまいました。

### 「泉貨紙」の復活

その後、故・菊澤尋吉氏が「民俗資料として紙漉き道具が残っていても、それを後世に伝えなければいけない」と一念発起。更に、泉貨紙を漉いた経験のある故・新倉五郎氏



や故・谷口一美氏らが、その「泉貨紙を復活させたい」という思いに賛同し、昭和60年、広見泉貨紙保存会(代表・新倉五郎)を結成しました。

そして、昭和62年、泉貨紙第1号が復活。平成6年には、小倉コミュニティセンター内に作業場が完成しました。

どの地域の紙作りにおいても、機械や薬品に頼るところが増えていく中、現在、「泉貨紙とは」にこだわり、人の手によって温かな風合いの「鬼北泉貨紙」が作り続けられています。